

3Dプリンタで革命的モノづくり！（久米原）

医療の可能性を切り拓く3D技術に期待（亀井）

久米原勝

アイジェット社
社長

×

亀井英志

長栄歯科クリニック
院長

本誌・好評連載中の医療コラム『未病の憂い』の筆者・亀井医師が医師の眼で探し出した有望企業を紹介する。医療ビジネス最前線。本稿では、いま話題の3Dプリント分野で、独自のビジネスモデルで成長を続ける「株式会社アイジェット」の久米原社長と、亀井医師の「対談」を通じ、同社の革新的な3D技術、そのビジネスノウハウの一端を紹介。3Dプリントの「ホントウの可能性」を知り、その引き出し方の巧みさで注目される久米原社長に亀井医師が迫る。

亀井 わが国でも3Dプリントをはじめとする新たなビジネスが一般にも知られるようになってきました。御社は〇九年の創業で、いわば「フロントランナー」として、市場をゼロから創

造されてきたと伺っていますか？

久米原 そうですね。私自身は、元々、2次元のデジタル印刷分野で仕事をしてきた人間です。3Dプリント関連のビジネスと言う

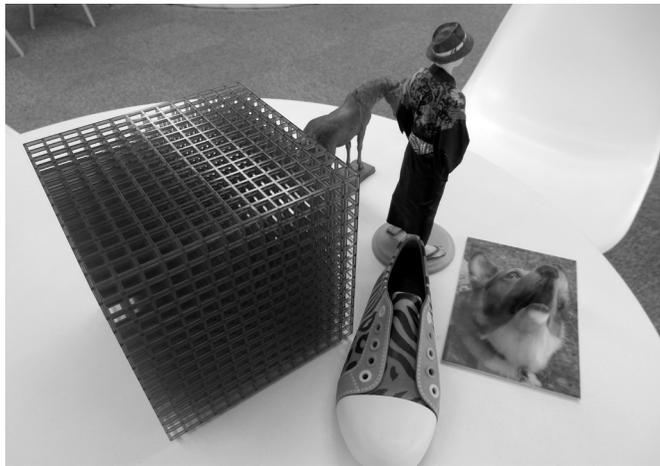
のは、ここ数年で急速に伸びてきた印象を一般の方はお持ちだと思います。が、実は、国内の産業界、モノづくりの領域では、部品や製品などの試作領域で、かねてより需要があるものな

んです。
亀井 産業界における「試作」というと「金型を起こして、というアレですね。
久米原 そうです。注型（ちゅうけい）



アイジェット社久米原社長（左）と亀井医師（右）
手にするのは3Dプリンタ作製の骨と歯だ

▼3Dプリンタで作られた製品の一部（クツは試作モデルだ）



や切削加工全盛の試作領域に、弊社は「型LESS」で素早く安価に、試作品作ります、とマーケティングをゼロからやりました。複雑な形状の試作品などは、何度も型を作り直す、あるいは、従来の型ベースでは、まず、試作ができなかったような、例えば、複雑すぎて型そのものが作れない、

あるいは、構造的に切削ができないようなものなどを3D（プリント）なら、これできますよ」と、精力的にやりました。

亀井 現状、御社は、試作品作成の域にとどまらず、住宅模型、一品モノのフィギア、インテリア小物、顧客も、B to B、B to Cと、多様なモノづくり、次世代

のモノづくりのモノづくり、企業として、進化を続けておられますね。
久米原 弊 社は創業以来、そして今後も3Dプリントで、何ができるか？を患直に追及し、創造していきま。一つのゴール、という大袈裟ですけど、エンド

ユーザーの一般の消費者の皆さんにとっては、世に溢れる様々な製品が、金型から作られているか、3Dで作られているかというの

は、関係がないし、おそらく関心もない、と思うんです。ただ、3Dプリントという革命的な技術が、モノづくりのコスト構造を劇的に変え、金型や切削では再現し得ないようなモノを生み出せることが一般にも知られるようになると、一気に、需要が伸びるでしょうね。従来のモノづくりの未踏の領域を切り開いていく存在ということ。今は、過渡期だということ。その次世代のモノづくりの担い

手として、将来にわたって、社会に、企業に、個人のお客様に、従来はなかった価値を提供し続けられれば、という思いは創業時から、変わらずに持っています。
亀井 私の歯科クリニックでも、御社の3Dプリン

ト技術で歯科矯正用のマウスピースの製造をお願いしています。医療領域も御社の将来性を考えると有望な市場ですね。

久米原 そうですね。亀井先生からのマウスピースのお話もそうなのですが、今まで世の中になかったモノを生み出すという点で、医療分野は、当社として可能性に満ちている事業領域という認識です。実は3Dプリントには、まだ、不得手な領域もあるんです。写真一枚で何でも作れるというフレコミ、ある種の誤解があるのが現状ですが、そんな現在の誤解を、ホントウに、何でもできる

に変えていく、その一翼を当社が担いたい。今は夢の段階ですが、当社としての成長の原動力でもあります。亀井先生のマウスピースも、世に二つとないモノ、へと進化させていけるよう頑張ります。

対談を終えて

アイジェット社の久米原社長には、私のクリニックで導入を予定している「歯科矯正用」のマウスピースについてのご協力をいただいている。

3Dプリンタを使ったモノづくりビジネスは、日本国内でも積極的に進められているが、同社が何よりスゴイのは、久米原社長が自社の技術やノウハウを活かせる余地のある、未開拓の市場を積極的に開拓しているその意欲的な姿勢だ。

医療分野も、かつてに比べ、新たな技術やノウハウをより積極的に導入するように変化はしている。

アイジェット社のような革新的な試みを続けている企業とのコラボで、人々の役に立つ医療や技術の提供をしていかなくは、時代に取り残される、そんな思いを新たにしたい。

（亀井英志）